

# 中国でのアフリカ豚コレラ発生に伴う国内養豚農場での防疫強化を

一般社団法人日本養豚開業獣医師協会（JASV）

中国でのアフリカ豚コレラ（ASF）の拡散が非常に懸念され、国内への侵入リスクが高まっています

8月3日の中国遼寧省瀋陽市でのASFの第1例目発生報告に続く8月16日第2例目発生報告は、第1例目から北東に約800km離れた黒竜江省の市場で集められた肉豚がその南西に約2000km離れた河南省の大規模屠場に運ばれ、そこで見つかったものでした。

3か所の発生場所の距離が非常に離れていることや多くの豚が集散する市場や屠場での発生であること、そして、第1例目農場に7月上旬に子豚を供給した同市の養豚場もASF陽性が確認されたこと（SHIC:アメリカ豚疾病情報センターからの情報による）などを考えると、既にASFウイルスは中国国内で広く拡散されていると推測します。今後、複数の省に発生が拡大する可能性は高く制御は困難を極めることが予想されますが、それらの詳細がどこまで報告されるかは不明です。

こうした状況のなか、中国のいたるところにASFウイルスは存在すると考え、国内養豚農場では防疫レベルを最高レベルに引き上げ、防疫強化をすぐに実施しASF侵入を防ぐべきです。

**ASFは非常に厄介な病気で、国内への侵入は全力を挙げて阻止する必要があります**

ASFはウイルスの病原性により甚急性、急性、亜急性、慢性など様々な症状を示しますが、急性型では豚コレラと酷似し40℃以上の発熱、食欲不振などを呈し、粘血性の下痢や嘔吐を示すこともあり、ついで後躯麻痺などの神経症状、耳や鼻端、四肢、下腹部にチアノーゼが認められ、発病後7日以内に死亡し、致死率は100%に近いです。解剖所見としては腎臓の出血や脾臓、リンパ節の顕著な腫大が特徴的です。感染後に中和抗体はできず、ワクチンも存在しません。ウイルスは血液中では常温で18か月、冷蔵で6年以上活性を保ちます。

さらに、アメリカの最近の研究では大豆粕や完全配合飼料などやウイルス液そのものでも常温で30日間活性を保ったことが報告されています。また、ウイルスは56℃・1時間では不活化されず、70℃・30分以上の加熱で不活化されます。このように、ASFウイルスは環境中や血液・肉の中では非常に長期間活性を保つことが報告されており、ASF発生防止にはウイルスに汚染された肉製品などを豚に与えないこと、そして、汚染の可能性があるものの消毒を徹底することが非常に重要です。

また、空気伝播は起こりませんが、イノシシ、ダニが感染し農場間の伝播に関与する可能性があります。消毒液はほとんどのものが有効ですが、そのリスクに応じて使い分け、リスクが高い場合は塩素系製剤やアルデヒド剤を使用すべきでしょう。

## 国内養豚場で実施すべき具体的な防疫強化策

先ず、飼養衛生管理基準を順守し、衛生管理区域の明確化、衣服長靴の交換、消毒の徹底、及び野生動物の侵入防止を実施すべきです（農水省作成の予防対策の重要ポイント参照）。次に、より具体的に防疫強化策を示します。

1. 不要不急な外来者を農場に入れないこと。  
特に中国渡航歴が1週間以内にある人は入れないこと。また、入場者は入場者記録を記入すること。
2. 衛生管理区域内に宅配便業者や郵便配達などを入れないこと。
3. 衛生管理区域内に進入する全ての車両を消毒すること。
4. 衛生管理区域内には、少なくとも専用の衣服・長靴に交換して入ること。
5. 農場内に持ち込むものは全て消毒すること。
6. できるだけ中国産のものを使わず国産などに切り替えること。自家配飼料使用の場合、特に大豆粕。
7. 中国産のものをどうしても使う場合、
  - 1) 袋に入った製品なら、農場に持ち込む前に袋を一袋ごと消毒すること。
  - 2) メーカーに問い合わせ、製造工場、中国国内の輸送体制の防疫確認と強化を依頼すること。
  - 3) 資材、機材などは、メーカーに依頼して、国内到着時に消毒を実施すること。また、農場に持ち込む前に消毒すること。
  - 4) これらの場合の消毒液は塩素系製剤あるいはアルデヒド剤を使用すること。
8. 残飯や肉製品などを基本的には豚に与えないこと。やむを得ず給与する場合は、70℃、30分以上の加熱処理をしたものに限ること。
9. 農場で働く従業員等には、以下のことを徹底してもらおうこと。
  - 1) 7日間以上の空白期間を取ってから衛生区域内の仕事に就くこと。
  - 2) 農場外で使用していた衣服、靴などを農場内に持ち込まないこと。
  - 3) 海外旅行等で購入した食料品は決して、日本に持ち込まないこと。
  - 4) ASF 発生国への旅行等は当面、延期すること。